

第二節 建武の新政・南北朝時代と九州の動向

一 建武の新政と郷土

恩賞と国司・鎌倉陥落後、鎮西探題の滅亡を知った足利高氏は、大友貞宗の注進状を天皇へ奏聞した旨守護の任用を、元弘三年（一三三三）六月十日付で知らせ、同十三日には、召人・降人などのことを

計らい沙汰するよう、大友貞宗に命じた。

後醍醐天皇は、鎌倉が陥落したことを知らないまま、五月二十三日、伯耆船上山をあとにし、六月四日、京都東寺に到着した。

天皇は、六月七日、まず持明院統の御領を安堵し、大社寺の所領を安堵し、八月に入って、恩賞のことに着手した。十月ごろ、雑訴決断所が設置され、訴訟の処理に当たった。建武元年（一三三四）八月には、組織が整備されて、八番に分けられ、一〇七人もの職員が配置された。

その一番（五畿内担当）一四人の中に、宇都宮兵部少輔公綱がいた。

公綱は足利尊氏（高氏改名）と行動をともしていたが、後醍醐天皇の信任を得て、側近の一人となり、足利尊氏と対立するようになる。

建武政権の特色の一つに、国司と守護を混じて任用していることがあげられる。新田義貞を越後・上野・播磨三か国の国司とし、楠木正成を摂津・河内二か国の国司に補任し、少弐貞経を筑前・筑後二か国の守護に、同頼尚を豊前の守護とした。平清盛や源頼朝が数か国の知行国主となった例や、少弐資能が三前二島の守護となったような例はあったが、一人が数か国の受領を兼任するような例はなかったのである。もともと守護の多くが、在国司職などを所持するようになり、また国衙の職務を守護クラスの武士が執行するようになっていたから、さして抵抗を感じなくなっていたのであろうか。

糸田貞義・規 上総掃部助高雅、同左近大夫貞義已下の輩与党の事、当国の地頭等を相催し、対治すべし
矩高政の乱 と云々、早く仰せ下されの旨に任せ、来たる廿九日出京の間、用意を致し、同じく下国せ

しめ、合戦の忠を致さるべく候、よつて、執達件の如し

「建武元」
 八月十二日

「少弐貞経」
 妙恵(花押)

田口孫三郎殿
 (信連)

これは、上洛していた少弐貞経が、同じく在京していた田口信連(のぶつち)に、下国して規矩高政・糸田貞義の乱を鎮定せよと催促した史料である。

筑前『中村文書』・肥前『深堀文書』などには、七月九日、誅伐(ちゆうばつ)のために著到したとあるから、『田口文書』の史料よりも一か月以上も前に九州で大規模な合戦があったことになる。

『深堀系図証文記録』によると、前鎮西探題北条英時の猶子規矩高政は、筑前の山鹿・芦屋辺に隠れていたが、建武元年正月、筑前帆柱城(八幡西区)に挙兵し、弟の糸田貞義は筑後堀口城(三池郡)に挙兵した。

後醍醐天皇の命令で、少弐頼尚らが高政以下を誅伐し、大友氏時（貞載の誤り）らは、貞義を誅伐したと述べている。

この事件を唯一詳しく記述しているのは『歴代鎮西要略』である。

それによると、建武元年（一三三四）正月、宗像大宮司氏が天皇の命令を受けて、帆柱城の逆徒を討たんとしたところ、豊前門司城に拠っていた長野政通・貞通兄弟が豊前の兵をもって、裏宗像氏を後詰めしたために、宗像大宮司氏は敗れて、薦岳城へ逃れ立てこもった。三月上旬、少弐・松浦・原田・秋月・宗像氏が帆柱城を攻め、大友・菊池氏らは筑後堀口城を攻めることになった。

新少弐頼尚は筑前・肥前の兵二万をもって豊前へ向かい、大友貞載は豊後・筑後の兵一万余をもって筑後国へ向かった。少弐勢は帆柱城の砦とりで数か所を破り、山鹿へ向かい、山鹿筑前守政貞を逃亡させた。続いて、帆柱城を攻撃して、規矩高政を規矩城へ退却させた。長野政通が降伏して、高政も規矩城で滅んだ。頼尚は捕虜を引き立てて上洛した。

四月、大友貞載が筑後堀口城を囲むと、星野・黒木・草野・間注所の諸氏が、大友方に降り、四月十二日糸田貞義以下は堀口城で滅んだ。

菊池武重は、このころ、糸田城を陥落させたという。

この記述と、史料との間に、月日の差があり、内容もそのまま信用できるものではないが、企救郡や山鹿が舞台となったことは考えさせられるものがある。



規矩高政の花押

土佐の『蠹簡集残篇』に、企救郡吉田村（小倉南区）の地頭武藤吉田孫次郎入道宗智の言上が出ている。それによると、兄の武藤新左衛門入道崇観が規矩高政に加担して、惣領職を闕所けつしよされたという。

企救一郡の国衙領や山鹿庄が北条得宗領であったことから考えて、その地頭代官を務めた長野氏や山鹿氏が、規矩高政をかくまい、下地の引き渡しを拒んで挙兵したものと考えられる。

なお、このころ闕所されている下毛郡大家郷司藤原久明（菅津又三郎『阿蘇文書』）、京都郡草美彦三郎入道、企救郡曾根弥四郎入道、田川郡白桑紀平四郎入道らも、規矩高政や糸田貞義に加担したのではあるまいか。

北条氏残党の挙兵は長門国でも起こり、豊前・肥前の武士が渡海して、建武二年正月、越後左近将監入道（金沢貞将の子カ）、上野四郎入道（長門探題北条時直の子カ）らを長門の国府佐加利（下山・盛山）城に攻めて生け捕りにした（『田口文書』・『武藤吉田文書』）。

二 足利尊氏の反逆

京都突入と九 建武二年（二三三五）七月の中先代の乱をきっかけとして、翌月鎌倉に下向した足利尊氏州への敗走 は八月十五日、新田義貞の罪悪を数え上げて叛意を明らかにした。

尊氏の弟直義は、十一月二日、新田義貞誅伐のために、味方に加わるよう諸方の武士へ呼びかけた。

尊氏を討つため、鎌倉へ向かった新田義貞を大将とする官軍は、箱根と竹の下での合戦で、大友左近将監貞載らの寝返りによって大敗し、都へ逃げ帰った。尊氏はこれを追って、建武三年（二三三六）正月十日、